

初台リハビリテーション病院

新型コロナワクチン予防接種

渋谷区からの新型コロナワクチンの供給が10月末までで終了となりました。当院では新型コロナワクチン接種施設として渋谷区住民の方々へ6月・7月に200名、また入院患者さまへは約150名の接種を行いました。試行錯誤の中で運営を行っていたため、皆さまへご迷惑をお掛けすることもあったかと思いますが、大きなトラブルもなく行うことができました。ご協力ありがとうございました。まだまだ予断を許さない状況は続きますが、感染対策は引き続き徹底して行って参りますので、よろしくお願いたします。



船橋市立リハビリテーション病院

ゴーヤの栽培を行いました。

今年も緑のカーテンこと、ゴーヤの栽培を行いました。専門業者のアドバイスのもと、土の入替え・追肥・毎日の水やりの量などを調整し、丁寧に育てました。おかげで豊作! 7~9月までゴーヤの収穫ができました。一昨年までは患者さまとゴーヤの収穫を楽しんでいましたが、コロナウイルスの感染対策で今年は叶わず。収穫したゴーヤは、職員が持ち帰り、おいしくいただきました。来年も豊作になるよう、そして患者さまと収穫が出来るよう願っています。



船橋市リハビリセンター

消防訓練を実施しました。

当センターでは、建物を他の法人と共同で使用しており、年に2回、合同で消防訓練を行っております。今回は、避難誘導と消火器操作の訓練を中心に行いました。実際の火災を想定し、他施設と連携して消火・避難を行うことで、いざという時に慌てずスムーズに連携した行動をすることが可能となり迅速な避難に繋がります。火事はもちろんのこと、自然災害も増えていますので、日頃から意識を持って訓練し、皆さまに安心して当センターをご利用いただけるよう努めて参ります。



在宅総合ケアセンター元浅草

通所リハ、ひまわりプロジェクト活動!!

今年で6年目となるこの活動は、ひまわりを「復興の花」と位置づけ、東日本大震災の被災地にひまわりの花を咲かせ、暮らしの中に「心の癒し」「笑顔」「元気な心」を育ててもらいたいという想いをこめて実施しています。種とちらしをセットにした「種袋」の作成や、種から育てた苗を被災地に贈る等、毎年行うことで当センター通所リハの活動の一つとして定着し、利用者の皆さまは社会貢献の機会を得ると共に、達成感や喜びに繋がる活動として、楽しみながら取り組んでくださっています。



在宅総合ケアセンター成城

整形外科の標榜を行いました!

当院では、今年度より整形外科の診察を開始いたしました。関節痛、首、腰の痛み上肢・下肢の痛み・しびれなどの症状がある方、スポーツの怪我や障害でお困りの方、骨粗鬆症が心配な方へリハビリテーションチームの力を最大限に活用し予防から治療まで必要な支援を行います。超音波による検査、ハイドロリリース、各種ブロック療法、PRP療法等特色ある治療を行っていますので、詳細については当院のHPを是非ご覧ください!!

整形外科外来診療時間

曜日	日	月	火	水	木	金	土
午前	-	●	●	-	●	●	-
午後	午後の外来診療はございません						

診療受付:
午前8:30~11:30
診療時間:
午前8:30~12:00



kisei-kai
情報誌



2021年5月、輝生会会長の石川 誠が逝去いたしました。

会長の石川は群馬大学医学部卒業後、佐久総合病院脳神経外科、虎の門病院神経外科等を経て、社会医療法人近森会近森病院リハビリテーション科、近森リハビリテーション病院に勤務後、医療法人財団新誠会、医療法人社団輝生会を立ち上げ、回復期リハビリテーションに尽力しました。今号では、リハビリテーション医療の新たな取り組みを始めた近森時代から輝生会での活動を、共にしてきた方々から代表して思い出を語っていただきました。

「リハビリテーション医療の世界に石川さんが与えた影響」

医療法人社団 輝生会
理事長 水間 正澄

日本のリハビリテーション医学は、戦後に発展してきました。しかし、リハビリテーション医療の普及が伴っていたとはいえ、術後の患者が寝たきりになってしまったり、リハビリテーション医療を受けるにも遠隔地等に限られていたり、退院してもその後の生活において寝たきりになってしまふことも珍しくありませんでした。脳外科医であった石川さんは、虎の門病院分院でリハビリテーション医療に携わり始めて、早期離床と自立支援をする看護体制を目的にされ、寝たきり発生防止に看護の力が大きいことを確信されました。そこで、病棟看護・介護を中心としたPT・OT・ST・MSW*等による強力なチームを形成すること、さらには、退院後も適切なリハビリテーション医療の提供が必須であることを感じておられたようです。

1991年代に近森リハビリテーション病院で、リハビリテーション医療の新たな取り組みを始め、PT・OT・STの病棟配属体制・365日リハビリテーション体制、退院後のフォローアップなどを実践されます。このような診療体制の効果や必要性を学会で報告されていましたが、学会関係者には十分には理解されず反応は芳しくなかったことを覚えています。

私が最初に石川さんとお会いしたのは、1996年日本リハビリテーション医学会のパネルディスカッションで同席したときでした。地域医療における一般病院でのリハビリテーション医の役割を、広い視野で熱く語られていました。

近森会で回復期リハビリテーション医療のモデルを作り上げ、この取り組みの実績をもとに、2000年度に世界に誇れる「回復期リハビリテーション病棟」の制度化へとつながり、ようやくリハビリテーション医学会からもその功績が認められるようになりました。

その後は、活動の場を東京に移し、初台リハビリテーション病院を開設、回復期~生活期の5拠点での活動に拡大し新たな挑戦を始めました。回復期リハビリテーション病棟のモデル確立・在宅総合ケア体制の確立・地域リハビリテーションの推進という目標をたてましたが、リハビリテーション病院は全国の回復期リハビリテーション病棟のモデルとなり、在宅総合ケアセンターでは退院後の在宅生活の支援体制を確立し、各拠点では地域リハビリテーションの組織化と教育啓発活動を行うなど、各地域においてリハビリテーション活動を支える役割を果たしています。

25年前の学会で石川さんは「リハビリテーション医は、我が国の地域医療を国民の生活に根ざしたヘルスケアへと変革・展開するためにこそ立ち上がるべきではないだろうか」と締めくくられました。その言葉の通り、強力なリーダーシップをもって取り組み続け、リハビリテーション医療の転換期に大きな足跡を残されました。

私たちは、これからも石川さんのリハビリテーション医療に向き合うマインドを受け継いで、理想に向かって日々取り組んで参ります。

*注釈 PT:理学療法士 OT:作業療法士 ST:言語聴覚士 MSW:医療ソーシャルワーカー

輝生会の 基本理念と方針	■「人間の尊厳」の保持	■「地域リハビリテーション」の推進	■「情報」の開示
	■「主体性・自己決定権」の尊重	■「ノーマライゼーション」の実現	
輝生会における 患者さまの権利	■ 人権を尊重される権利	■ 最善の医療を受ける権利	■ 自らの意思で選択・決定する権利
	■ 自分の診療の情報や記録を知り、求める権利		■ プライバシーの保護を求める権利

近森から輝生会へ～石川さんの歩み

やり抜く力

森本 榮

常務理事 理事長補佐／生活期支援局長

理学療法士12年目の1988年、近森病院在職の石川誠さんと酒を酌み交わし話す機会を得た。初対面だが、「この人ならば人生を賭けられる」と決心し、石川さんとの33年がスタートした。

当時の石川さんは、平日日中は入院・外来診療、当直週3回、当直以外は会議、終わると皆で飲み会、メには川べりの屋台でラーメンと餃子、午前様で病院に戻り依頼原稿や残務処理、土日は在宅患者の往診。これだけ忙しくて、仲間の相談に応じる懐の深い人だった。

近森での私への指示は1991年頃から「PT*30人以上集める」、集めれば1995年頃に「土曜、祭日訓練しろ」「病棟配属しろ」だった。前人未到の課題に感じたが、職員同一心不乱に取り組んだ。それは、石川さんの人をその気にさせる言葉とリーダーとしての行動があったからで、その人間力が夢を現実のものにしたのだ。病棟配属達成時に、一流旅館の大広間で職員全員参加の大宴会を行い、石川さんは夢を達成した喜びで文章には書けない酔い方になっていた。

さらに全国展開に向け、リハビリテーション医療の発展に奔走する。厚労省へ25年近く通い続け、夜中に厚労省から電話を受け、朝まで資料作成する姿に幾度も遭遇した。結果、厚労省内部で「リハビリテーション医療は石川誠さんに相談」と言われるまでになった。

石川さんは「近森の仕組みで終わってはだめだ、全国にこの取り組みが普及しないと何にもならない、気を抜くな」と言った。様々な活動をやり抜き、多くの賛同者の輪を作ることで、回復期リハビリテーション病棟の新設に繋がったと思う。以後も、医療法人社団輝生会の創設者として、多くの若者に生き様を見せてきた。

私が法人への遺言を託された際に「やりきった、思い残すことはない」と笑いながら語っていた石川さんの顔を忘れることができない。傍らで様々な経験から学んだことは私の33年の財産である。心から感謝します。

*注釈 PT：理学療法士

輝生会の立ち上げ～石川マジック

高橋 春美

生活期支援局部長

初台開院前年の夏。セコム本社の1室で石川さんに初めて会った。初台の採用面接。面接の最後に「じゃあ飲みに行くか」と言われ、すでに入職することが決まっていた方々に同行した。高そうな食事とワインをご馳走になったものの、合否もわからず合否の連絡方法も教えてもらっていない。私だけ気もそぞろ。これで落ちるなんてことはあるのか?と酔った勢いで合否はどうやって連絡をもらえるのか石川さんに聞いてみた。「落とすなら飲みになんて誘わないだろう。そんなこと気にしてたのか」と大笑い。早く言ってよ…蒸し暑い夏の夜の出来事だった。

初台開院1年目、外来担当医は石川さんだけだった。年度が変わるころには「忙しくて昼飯を食う暇もない」と嬉しそうに文句を言っていた姿を思い出す。石川さんが診察している姿が好きだった。石川さんから出されるパワー(これを情熱というのだろうか)を患者さまやご家族が浴びると、笑顔になり、声が大きくなり、心が、身体が、動き出す。それを私たちは石川マジックと呼んでいた。石川さんのグッズを作ったらお守り代わりに売れるんじゃないか、そんな話をしては笑っていた。

開院当初はたくさんたくさん夢を語っていた。人員も少なく忙しかったけれど、新しいことをしているエネルギーにあふれていた。今にして思えば、スタッフもまた石川マジックにかかっていたのだろう。あの時期を過ごさせていただけただけことに感謝している。



法人内研修でのポイントヒア



訪問診療に向かう



ラグビー部対外試合にて

船橋における地域リハ活動

江尻 和貴

船橋市リハビリセンター 副センター長

2008年10月、石川さんの声かけで「船橋市脳卒中地域医療連携パス」の初会合が開かれ、パスは完成したが、間もなく「千葉県共用脳卒中地域医療連携パス」ができ、船橋市版パスが活用されることはなかった。

石川さんは「残念なんかじゃないよ。あれでネットワークができたでしょ。作りたかったのはこのネットワークなんだよ」と全く意に介さない様子だった。そしてこのネットワークを活用し、2009年10月、地域リハ研究大会が行われた。

現在まで21回を数える研究大会では、終了後に懇親会を行う。石川さんのこだわりは二つ。会場が座敷であること、日本酒があること。必ず燗酒とお猪口を持ち、全員の席を回り熱く語る。締めは必ず「ポイントヒア」と呼ばれる掛け声。みんなで円陣を組み「〇〇(先生の名前や地域・団体が多い)!!ファイ!!オー!!ファイ!!オー!!ファイ!!オー!!」と、互いを称えあうのだ。皆笑顔になり、会場を後にしていた。「船橋は、医師会と市の協力体制ができている。さらに歯科医師会、薬剤師会、ケアマネ協会など団体もあり協力的だ。地域リハを推進する好条件は既にある。僕等はきっかけを作るだけなんだよ。船橋をモデルに、他の地域も進めて行きたい」と常々話していた。

今、渋谷区・目黒区・世田谷区、そして台東区でも地域リハの推進が進められている。石川さんの思いが受け継がれ、さらに発展していくだろう。

お知らせ



2022年5月29日(日)
都市センターホテルにて
輝生会主催の1周忌追悼行事を
予定しております。
詳しくは追って、輝生会ホーム
ページでご案内いたします。

<https://www.kiseikai-reha.com/event-ishikawa.html>



クロスカントリースキー参加者と

患者さまとのかかわり

澤潟 昌樹

在宅総合ケアセンター元浅草 副センター長

石川さんは日頃から「自分が障がい有る状態になった時、多くの方が自分のために本気で考え支援してくれたら、よし俺も頑張ろうと思えるだろう。」と語っていた。「自分達が良くしているなんて間違っても誤解してはいけない。あくまで本人の自然回復を邪魔せず、また挑戦しようと思えるようにサポートすることが我々の役割であって、そのためには異なった専門性を持つ専門職がチームを組む事が重要だ。」と述べていた。これが輝生会のチームアプローチの根幹の考えだと思う。

石川さんの代表的な活動の1つにクロスカントリースキーがある。当事者の方々が自信をつけ、一歩踏み出す事を支援する活動として石川さんの発案で始まった。障がい有るから特別扱いするのではなく、参加者もスタッフも皆平等。スキーが初めてでも、最初から板を履いて滑ることから始めるのが石川流。障がいの有無は関係なく、出来ないことがあれば、出来る人が支援する。遊ぶ時は目一杯遊び、お腹が空いたら美味しいものを食べて、皆で酒を飲み語らう。当事者の方々が自分は1人ではない、支えてくれる仲間がいて、自分がやる気を出せば新たなことにチャレンジできると思えるように寄り添うことの大切さを教えてもらった。1升瓶を抱え、にこやかに当事者にお酒をついで回る石川さんの姿が目焼き付いている。



懇親会にて



クロスカントリースキーにて